

平成 22 年度部会活動功労賞

(部会 CT 賞)

「部会 CT 賞設立にあたって」(今野 幹男 部会 CT 長)

化学工学は、産と学からの多数の研究者が集まり、関連する研究や技術の情報交換の場として、部会を単位とする制度が運営されています。部会には、さらに専門的な集団として分科会が組織され、その連合体として年会、秋季大会の研究発表の主要な役割を担って頂いています。現在、部会は、基礎と展開の技術分野をあわせて、全部で 14 部会にのぼり、化学工学の今後が部会の活性化にかかっていると言っても過言ではないと思います。部会では、シンポジウム、セミナー、講習会、国際会議など様々なイベントが企画運営されています。学会の運営は、大体がボランティアですが、とりわけ、若手の部会員の方には、縁の下の力持ちとして、事務局の仕事から、部会の企画運営にわたり多大な貢献を頂いています。新しいグループの立上げや企画運営に対するアイデアなど、部会活動の活性化に貢献のあった若手の方に対して、その功績を顕彰したいというのが、この賞の趣旨です。

今回は、極めて優れた貢献をされた 3 名の方を選出することができました。受章者の方には、これまでの活動に対して深く感謝するとともに、今後の部会活動についても御支援頂くようお願い申し上げます。この賞が受賞者のご苦勞にいささかでも報いるものであれば幸いです。

1) 題目:「様々な広報活動を通じた熱工学部会発展への多大なる貢献」 中曾 浩一氏 (熱工学部会)



中曾氏は、熱工学部会設立直後の 2003 年から部会の事務活動に携わっており、本部会のホームページを開設当時 (2003 年) から現在に至るまで 7 年以上にわたり管理しています。会員、非会員を問わず行事案内や活動報告を積極的に発信し、普及に努めています。化学工学会会員でなくとも部会に興味を持たれた方が気軽に部会に参加できるようにホームページに参加申し込み窓口を設けるなど会員数拡大に努めております。2008 年には英語版のホームページも稼働させ、国内外に情報発信しております。さらに、同氏は 2007 年度から現在に至るまで本部会の広報を担当しております。部会の執行部役員の中では、年齢が極めて若いにもかかわらず、本部会の窓口として精力的に活動しています。本部会は、現在、分科会のような小規模な研究グループ活動を行っておらず、ほどよい会員数で小回りのきく研究者集団と位置づけて活動しております。同氏は役員会等にも積極的に参加し、部会の運営に携わっております。本部会の会員数も設立当初は 80 名ほどでしたが、現在は約 180 名と倍増しており、同氏の地道で精力的な広報活動がその一因と考えます。

また同氏は、所属大学の関係から特に九州地区で開催された熱工学部会主催の講演会や見学会などの行事では事務局として中心的な役割を担いました。このほか、他部会や他機関と共催させていただいた国内、国際行事、最近では「International Symposium on Innovative Materials for Processes in Energy Systems (IMPRES) 革新的エネルギー材料のための国際シンポジウム (2007 年)」の企画運営、「The 2nd, 3rd International Workshop on Energy and Environment in Chemical Engineering (2009, 2010 年)」の事務活動を行いました。これらの国際会議においては、実際にセッションの座長を務めて場を盛り上げるなどしてきました。熱工学は化学、電気、バイオとさまざまな分野の基盤となる分野ですので、化学工学会の枠にとらわれることなく情報発信していくことが大切です。

同氏は社団法人粉体工学会の講演会などで熱工学、特に粒子充填層内の伝熱促進に関して毎年のように発表しており、2009年には粉体工学会誌に投稿論文や解説記事を発表したり、社団法人日本粉体工業技術協会の主催する技術見本市で発表したりするなどの活動を行っております。

以上の理由から、同氏の「様々な広報活動を通じた熱工学部会への多大なる貢献」が部会 CT 賞の受賞にふさわしいと認められました。

2) 題目：「化学工学会環境部会における運営及び研究活動における貢献」 酒井 裕司氏（環境部会）



酒井氏は、初代環境部会長である故・定方正毅東大教授の下での環境部会の立ち上げ時から現在に至るまで、長期間にわたって庶務幹事の任にあり、環境部会における企画立案や会員増強はもとより、部会における雑務全般を精力的にこなしてきました。環境部会は他の部会に比べて設立の準備が遅れたにもかかわらず、現在 600 名以上の会員を擁する最大規模の部会に発展したが、縁の下での力持ちとして部会運営を支え、今日の発展につなげてきた同氏の貢献は、まさに部会活動功労賞に値するものです。

一方、研究面においては、同氏は、東大時代より現在の工学院大学に至るまで一貫して中国における環境問題を研究テーマとして展開し、各年の年会および秋季大会での環境部会シンポジウムにおいて研究発表を精力的に行ってきたほか、2010年発行の化学工学会論文集における環境部会特集号の編集、寄稿、日中化工シンポジウムにおける基調講演(Keynote Lecture)、さらには地球温暖化に関する化学工学会Web教材の制作(JST)などの業績を積み重ねています。このように、研究活動においても化学工学会における環境研究の発展に尽くすとともに、

各種情報発信を通じて研究に関する情報交換の要として貢献をしています。

以上の理由から、同氏の「化学工学会環境部会における運営および研究活動における貢献」が部会 CT 賞にふさわしいと認められました。

3) 題目：「部会活動の活性化と国際会議開催準備・運営における貢献」 陶 究氏（超臨界流体部会）



超臨界流体部会は平成 13 年に設立されましたが、陶氏はその前身である「超臨界流体高度利用特別研究会」の時代から特別研究会会員として参加し、特別研究会から部会への発展とその活動に大きな役割を果たしてきました。

同氏は超臨界流体部会において、平成 17 年度より部会幹事を務め、部会全体の運営に積極的に参画してきました。また、当部会は分科会制をとっておらず、超臨界流体の主要分野ごとに部会内に 5 つのワーキンググループ (WG) を組織して部会活動を行っていますが、同氏は「基礎物性」WG の副まとめ役にも就いており、WG の運営や報告書の執筆などにも寄与しています。基礎物性 WG は、当部会の基盤をなす WG のため所属する部会員は多く、その舵取りは部会全体の運営にも影響を及ぼすので、WG 運営に対する同氏の貢献は多大です。

特筆すべき事項として、第 41 回秋季大会（平成 21 年）において、同氏はシンポジウムオーガナイザを務めました。このシンポジウムにおいて超臨界流体部会は、学生の口頭発表を審査する学生賞を開始しました。

超臨界流体部会は過去にも同賞を設けたことがありましたが、新たに、より公平性・透明性を高めた審査項目と審査方法の策定、審査委員の選定法などの規程作りをすることとなりました。平成21年4月から作業が始まり、同氏が中心となって原案作成と修正を行い、新たな学生賞の規程を作ることができました。同氏はオーガナイザとしても、学生賞審査とシンポジウムの質をバランスさせたプログラム編成を行い、学生賞審査結果の集計など学生賞審査当日の学会場での実務についても一手に引き受けました。その結果、平成21年度の秋季大会では26件の学生賞候補者の発表があり、7件の学生賞の表彰を厳正なうえにも遅滞なく進行する事ができました。新たなスタートをきった学生賞は、学生賞受賞学生や部会員からも賞賛されることとなりました。同氏が尽力した学生賞は、本年度の秋季大会でも継続されました。学生賞創設のお陰もあって学生の発表件数も増加しており、部会活動活性化への同氏の寄与は大きいと判断されます。

国際会議の開催準備・運営に関しても多大なる貢献をしています。「International Symposium on Molecular Thermodynamics and Molecular Simulation (MTMS)」は、1994年に故中西京都大学教授が始められた日本発の国際会議です。これは超臨界流体を含む熱力学と物性研究の国際会議であり、海外の著名な研究者を日本に招き、日本の若い研究者と討論する場を設けることで、熱力学と物性研究分野の発展をはかる会議です。1994年以降3年ごとに日本で開催され、超臨界流体部会も毎回積極的に運営に協力しており、部会員の参加も多い状況です。2006年には第4回(MTMS2006)が、日秋日本大学教授を実行委員長として3日間にわたり千葉で開かれました。同氏は当時、日本大学の日秋教授の研究室に所属しており、Scientific Committeeメンバであると共に事務方のトップとして、会議会場関連の実務と連絡調整、海外からの研究者との連絡調整といった国際会議の開催準備、会議期間中の運営と実務のほぼ全てを担当しました。

また、同氏は国際会議費用補助の獲得にも尽力し、井上財団から援助を受けたミニカンファレンスを会議中に企画運営するなど、会議開催資金の面でも大きな貢献をしました。同氏の働きにより、MTMS2006は成功裡に終わることができ、超臨界流体部会も大きな学問的知見が得られ、海外の著名な研究者との交流が拡大しました。

さらに、会議終了後に会議発表論文の一部をこの分野の国際学術誌 Fluid Phase Equilibria (Elsevier 社)の特集号として出版するにあたり、Guest Editorである実行委員長の日秋日本大学教授のサポートとして、編集作業の実務を担当しました。

以上の理由から、同氏の「部会活動の活性化と国際会議の開催準備・運営における貢献」が部会CT賞にふさわしいと認められました。